
告白は激闘だ2

にーとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白は激闘だ2

【NZコード】

N4252J

【作者名】 にーとん

【あらすじ】

告白する人、される人。いつもその傍らにいるような、仲人が主人公の物語。

どうも、作者こと『一』とんです。

お久しぶりです。長らく小説を投稿していませんでした。
すいません…。

さて、これは『告白は激闘だ2』です。

激闘、の代わりに劇場、だとか惨状、だとか戦場、だとかにしようと
うと思つたけどやめました。

うん、ネーミングセンスねえな俺…。

で、まあ『告白は激闘だ』を読んで下さった方はともかく、全く
知らない方もいるはずです。

本当なら「『告白は激闘だ』の方も読んで下さいねー」とか書き
たいところなんですが、なにせ読み返したらひどい…。

でもまあ、ギャグ要素としては面白いところもあると思うけど…
…俺だけか？

そんな感じなので、だいたいの前回のストーリーを『おわり』
として綴りたいと思います。

前回読んでる人も忘れてるかもだし…。

めんどかったらどうぞ飛ばして下さいな。…いや、読んだ方が良
いかも。

それではおわりを始めます。

主人公、白石秋斗は春に産まれたのに秋斗。

いや、そんなことはどうでも良くって、彼は人と人を取り持つ、
『仲人』として校内に知られておりました。

そんな秋斗君に鳥肌たつぞう、あらため鳥原たつぞう君は「俺と
神野ちゃんを、カップル、もしくはそれ以上のいやーんな関係やあ
つはんうつふんな関係にしてくれ！頼む神様！！」と頼み込みまし
た。

その頼みを秋斗君は相当じりじりしてから（彼に言わせれば快く）承りました。

秋斗君は仲の良い後輩関野さんに、神野さんに『鳥原君をどう思つてゐるのか』聞いてもらいます。

そしてその腕前を見込んだ秋斗君は関野さんを子分にするのです。秋斗君は神野さんに鳥原君の『おっこまえ！』なところを見せようと、夏祭りの日に妹、白石凜とともに神野さんを誘拐し、鳥原君が助ける、という筋書きを用意したのですが、神野さんの思わぬ強さに困惑してしまい、失敗に終わりました。

その力は彼女の『多重人格』によるものであると、秋斗君は推測します。

後日、凜の計らいにより天ぷらパーティが開催されます。

そしてその時、秋斗君は神野さんに『鳥原君と付き合いたい』ということを知られます。

それを秋斗君は鳥原君に知らせます。これで任務終了だ、と秋斗君は安堵しますが現実はそう甘くありませんでした。

後日、学校に行くと秋斗君は鳥原君に怒鳴られます。

曰く、「告白してもフられた」と。

なぜだろう、と秋斗君が考えたところ、理由はやはり彼女の『多重人格』であるという結論に達しました。

その後、秋斗君と鳥原君は神野さんの全ての人格に鳥原君を好きにさせるため努力します。

そして最後の人格になった時、『笹川君が神野さんと付き合つている』という噂を関野さんは耳にし、秋斗君に知らせます。

不安になつた秋斗君は確かめるため、笹川君にことの真偽を聞きます。

それはやはり、ただの噂でしかありませんでした。

しかし、笹川君は神野さんの方が気になつてゐるようで、彼女について秋斗君から聞きます。

『多重人格』である、ということを知った笹川君は「じゃあ良い

や」と言つのです。

その言葉に対しても秋斗君は怒りました。

そしてその翌日。

秋斗君が朝起きると凛の姿がありませんでした。

そして、テーブルの上に一枚の手紙。

凛からの物と笹川君の物でした。

関野さんが、攫われたそうです。

そしてその犯人は笹川君。

秋斗君は鳥原君、神野さん、凛と共に関野さんを助けにいきます。
そこで、鳥原君の活躍により 笹川君をあっさり撃破。

関野さんを助け出します。

鳥原君のその活躍に、最後の人格の神野さんが惚れ、告白し、彼らは付き合い始めます。

ちゃんちゃん。

さて。

今回秋斗君はどのように活躍し、誰と誰をカップルにするのでしょ
うか。

それは俺にも分からぬ(おい)

#お問い合わせ（後書き）

だらだら更新ですが最後までお付き合っていただけたらな、と思います。
よろしくお願いします。

第一話～お泊まり会編

「つまりは、『うごづき』ですね。この学校に、転校生がやってくる、と」

「つまり、つていうかそのまんまで？」

「で？」

「いや、だから、転校生と言えばどつても美人で皆の気を引きまくり！ そしてそつすれば私たちへの依頼も増えるのではないかと」

「ほう」

なかなか…成長しましたね…関野さん。

そして僕は白石秋斗です。お久しぶりですね…。

僕たちが出会ったのはそう、あの終戦の時あの地で…

「聞いてますー？」

「はっ！？ 聞いてますよ？ 聞いてます！」

「何狼狽してんですか」

「うわあ『デジヤヴだー』

前にもこんなやりとりがあつたような…。

「聞いてなかつたようなのでもう一度言います。先生に聞き込みをしたところ、転校生はお約束な感じで美少女だそうです。」「なるほど」

確かにこれはぐる気がしますね。

そもそも報酬とかとっても良いんじゃないでしょうか…。

そうすればがつぽがつぽ…うふふ…。

「秋斗さん…何一人で笑ってるんですか」

「いや、元よりこういう顔なんです」

「えええ！？ ジャああれですか！？ 今までの顔の方が作つていた顔！？」

「表情筋の病気なんです」

「ひいい！？ 秋斗さんの顔がよりマイルドな笑顔に！？」

「じゃ、そういうことだ」

キリツ。顔を元に戻します。

「秋斗さん…なんか違う人の顔になつてます」

「…………誰の顔だか当てて『ごらんなさい』」

「ペリーだ！ ペリーの顔だよ！ 開国を迫つてくる……」

「どんな顔だかこっちが知りたいです！」

うーん、そんな顔になつていたなんですか僕は。

しかし…関野さんとの会話は正直疲れます。

「はあ……。そのまま関野さんルートに入つてしまつのでしょうか」

「まあ、フラグは充分に立つてると思ひますけどね」

「…………うーむ。回避するにはそうすれば良いんだが」

「いやいやいや…？ 自分でフラグ立てといてルート回避するとか何がしたいんですか…？ ビックリしちゃうだと誰の好感度も上がらないからバッドエンドになりますよ…？」

「…………それが僕の、トゥルーハンド」

「かつこいい！？」

「孤独に生きる僕に相応しい、終焉^{おわり}」

「なんか中一くさい！」

「くっ、また暴れ出しやがった！ おそれまれ僕の右手…！」

「完全に中一ですよそれ！」

疲れるけど乐しいですね…。

ネタが通じるこの樂しさ。

「…………たて。そろそろ僕は帰りますよ」

「…………うーん、秋斗さんの家ですけど」

「…………。そこええば今まで流してたけどなんで関野さんは僕のこと下の名前で呼んでるのでしょうか」

「…………」

……秋斗さんが良いって言つたんですよー!?

「な、馴れ馴れしいですよー!?

「いやだから本人の承諾を得てるんですけどー!」

「そうでしたっけ

「ぼけてきましたね」

なつ!?

この子はなんて失礼なことを言つのでしょつか!

「そんなこと言つとまた^{あや}に覺醒めますよ?」

「秋斗さんはルビを使いすぎです」

「……まあ夜も遅いんで泊まつてしまかなわー」

「えー?」

「うん。それが良いです。この時間に外を出歩くのは闊野さんとは
いえ危ないです」

「あ、ありがと^う」「やこまわー」

「じゃあもうちょっと話しますか」

「うーん。なんか僕、この子に甘くなつてゐるような気がします

……。

第一話 ～お泊まり会編（後書き）

いやあ、プロローグ的なだけ更新つてのもどうかと思つたで一話
を更新します。

これからは本当に更新遅くなるかもです。
なぜか長くなっちゃったけど次話からは短いんだからね！
そこんところ勘違いしないでよね！！／＼
ごめんなさい

第一話　～お泊まり会編～

まあそんな感じで楽しく話しています。白石秋斗で「やれんす。
じ、そこ」。

「お風呂にする？　『』飯にする？　それとも私？」

「凛…。密がいるのによくそんな冗談を言えますね」

「いや、私の家だし」

「やうだよー、メイドちゃんも別に私に対しきばんないで良いんだよー」

「気張るって何か使い方が間違つてゐる気がするのですが僕だけ？」

「今のかばんないで、は氣張る、じゃなくて黄ばむ、の方だぞ兄貴」「うちの妹が関野さんの前では大変なことに…？　いや…日本人は肌の色が黄色だからもともと黄ばんでるのでしょうか…」

また謎が増えてしました…。

「あー！　そういうえば私パジャマ持つてきてないー」「かわいいー…」

「一つめの台詞は凛のですよ。一応言つておきますが。

「な、何がかわいいのかなメイドちゃん」

「ぱ、パジャマ…。寝巻き、ではなくパジャマだぞこのとせめきが分かるか兄貴…！」

「ゆーれーるー」

肩を揺らさないでください。

「あ、すまない兄貴。なんだか興奮してしまった」

「……凛はいつからブロコンからレズに転職したんですか

「やめてくれ…！　どちらも黒歴史になりそだから…！　私はノーマルだから…！」

「そりですよ秋斗さん。メイドちゃんはレズじやなくて百合なんですよー」

「なんとこつか…。どちらにせよ関野さんが危ないんですけどね…。

「で、話を戻しますけど」

「なんでしたつけ…僕の相応しい終焉についてでしたつけ？」

「違います…！　パジャマが無いんですけどどうしましょ！」

話です！」

「く…かわいい…」

「そうですね…。凛のじや小さいですか？　取りにいく、じゃ意味ないし」

「そういうえば親に連絡しなきゃ…。電話借りていいですか」

「どうぞー。レンタル料取りますけど」

「……まあいいや」

関野さんがどんどん横着になつてゐるよつたな気が…。

「あー、もしもし？　私私、私だけぞー」

「私私詐欺だぞ兄貴…」

「しつ！　人が電話してるとときは黙つて盗み聞きするんです！」

「…………」

「関野さんが黙つちやつたぞ兄貴！」

「しつ！　人が電話してるとときは黙つて盗み聞きするんです！」

「あー、うん。それでさー、今日はメ…凛ちゃんつていつお友達の家にお泊まりするんだけど良いかなー？」

「スルーだぞ兄貴！　しかも私のことをメイドちゃんつて言つてやつた！」

「…ふむ。僕ではなく凛の名前を使つてひょつて親を安心させるという戦法ですか…」

なかなか頭が切れるようになりましたね…。

「うん。そう。うん。え？うん、いるよ？　でも大丈夫。秋斗さんは私がこれと決めた人だから…」

「なんだかおかしくないか？」

「い、いや…………だ、大丈夫ですよ」

「え？　何？　電話を替われ？　無理無理、今秋斗さんお風呂入つてるもん…………いやー、いくらなんでも一緒にお風呂は早すぎ

るでしょー！ あははははー！」

「何の話をしてるんだー！ 何の話をしてるんだうがあああー！」

「落ち着いて凜！ 深呼吸を！！！」

—
!

「それはもうや深呼吸じゃないですよ！」

「あれ、関野さんの突っ込みだー

「電話は終ったもんですか？」

「秋斗さん達が騒ぎ出すから切つたんですよ、電波が悪くなつたふ

四三

家の電話でそれは無理があります！

第一話　～お泊まり会編（後書き）

こんなに更新遅くなるつもりは…

W

修正しました～（自己紹介文）

「…で！ パジャマ Bieber すれば良いんでしょうが…」「そのまま寝れば良いじゃないですか…」

「嫌ですよ！」

「じゃあ裸で」

「…………」

「冗談ですよ？」

上田遺^{トトロ}で見つめてくる関野さん…。

どうも、白石秋斗で^{トトロ}るす。

「私…秋斗さんにならって…おもひた「それ以上は言わせんぞ関野さん」

「うわあああせつかくのシチュエーションがメイドちゃんに邪魔されたよう！」

「危なかったです…」

それはもう色んな意味で…。

「私の前でそういう行為に及んだら[写真を撮つてネットに]かかる

「それはやめてメイドちゃん！」

「関野さんはそういうのが興奮するんじゃないなかつたんですか？」

「秋斗さんまで！」

「そしてその内、金を出させて関野さんを…という寸法なんだが」「という寸法なんだが、じゃないです！ 秋斗さんもなんとか言ってください！」

「お金は…欲しいですか…」

「もつやだ！…」

仕切り直し。

「で…パジャマ^{トトロ}するんですか…！」

「凛のを借りれば良いと想います」

「つむ。それで良いだろ?」「うーん。

「無理です! メイドちゃんはまだ小学生!... 私は中学生!」

「... そうだったんだ」

「なんで驚いてるメイドちゃん!」

「てっきり園児かと」

「おかしいね! 明らかにおかしいねそれは!」

「てっきり作者の趣味かと」

「そこら辺は言っちゃいけないね! 明らかに言っちゃいけないね!」

「なんだかテンションが高いですね! 一人...」

「じゃあ帰れ、といつわけにもいかない時間だしな...」

「ぼそっと凜が呟きました。

「メイドちゃん私に敵意をもつてない?」

「そそそそそんなことないですよ!...?」

「キャラが変わってる!」

「ていうかパジャマの話題だけで喋りすぎです...」

「確かにそうだな... よし、私のを着せよう!」

「やつぱりそななるんだ...」

「着替えるから兄貴は入ってきたら駄目だぞ」

「私...秋斗さんにならって...おもつて『さあ行くぞ関野さん』

「いやあああああ服があ! 服が伸びるよメイドちゃん! 引っ

張らないで!」

「つるさい人だなあ...」

まあどうりあえず嵐は去った感じですね。

しばらくたつてから関野さんはリビングに戻つてきました。

「秋斗さん... ビウですか...」

「なつ... んてことないです」

「危なかつたです... それはもう色んな意味で。」

凛のパジャマは関野さんには少し大きくてその普段は隠れていた

意外と大きな声…あれ？

「はつはつは！ たあ関野さん！『貧乳はステーキ「いわむせ」によ
う！』

「邪魔された…」

不服そうな凛としかめつ面な関野さん。

「私だって秋斗さんにもんでもらえり「おつと危ない…！」

「邪魔された…」

不服そうな関野さん。

く…しかしかわいい…。

詳細な描写は次回で…！ です。

第三話　～お泊まり会編（後書き）

みんなばんばん口メしてくれて構わないんだからねーー！
ていうかしてくださいーー。

第四話 ～お泊まり会編～

ボタンは、畠山から上はあけてあり、彼女の鎖骨がむりむりと見え
る。

風呂に入つたらしく、髪ひとつと濡れていて頬が少し上気
していた。

「んばんは、由紀秋斗です。

最近お酔をそのまま飲むのにはまつでこます。嘘です。

「兄貴…。今見とれていたな」

「はつ…? そんなことはなかとですだ!」

「どこの人ですかそれ」

知らんとですだ!

「さて、私たちはもう寝るぞ」

「えー、私は秋斗さんとこつこつ「わあいわちだ関野さん」
「うわあ服が伸びる」

「…………」

ふう。やつとりぬかなくななりました。

しかし…転校生ですか…。気になりますね…。

「わーー、凛かやんつてばー、そんなに秋斗さんのこと好きなの?..

「…」

「…聞こえますよ関野さん…」

「…んだけ声大きいんですか…。」

「やうだ! 私は兄貴が大好きだ!」

「恥ずかしいし…」

「なんで声大きいんですか…。」

「…あれ、收まりましたね。」

「ーん。なんだろ、やっぱり凛はブラコンなんでしょうか…。」

確かに僕もそういう知識がつき始めたときは凛の……おっと危ない！

黒歴史黒歴史。

「ふう。僕も寝ますかねー」

自室に入つてぱぱっと着替え、布団を敷いて寝転ぶ。
うーん、やつぱりこの瞬間は最高ですね…。

「こんばんは秋斗さん

「ひい！？」

「兄貴遅いぞ」

「苦しいから上こは乗つからないでほしーんですけど…」

「む、私が重いと言いたいか

「全くその通りで」

「秋斗さんレーディにむかつてひどいです！」

「知らないですよー！」

現状を描写するといつも伏せに寝転んだ僕の左に関野さん上に凛です！重い！

「だがな兄貴、重いは想いなんだぞ」

「想われすぎて氣が重いです！」

「つまくない」「つまくないですわ

「…………何用ですか

「夜のお話」「夜のコイバナですよ秋斗さん

「じ自由にじうざ。お一人で」

「秋斗さんがいないと意味がないんですねー！」「やつさう、兄貴が
いないとな

「分かりましたよ…」

「…………え？ 何？ 私からなのか？」

「もちろんだよメイドちゃん！」「やついえばわつせは凛ちゅんつ
てちゅんと呼んでいたよつな

「ふむ…私の好きな人か…？ そうだな…私は…

「ふむふむ？ 言つてみな！」「スルーですか

「いない」

「駄目！」 「それは無じですー！」

「兄貴までーー？」

「ふふふ、僕は本当はうなのですよ…。なぜか今はいじられキャラになつてゐるけど」

「乗つかられてますけどね」 「私の尻にしかれてるがな」

「メイドちゃんのお尻小ちやくてかわいいよねー！ 舐めくつましたいー！」

「やめてくれ頼むからーー」 「やめましまひましまひこつのーー」

「ちつ、駄目だったか」

第四話 ～お泊まり会編（後書き）

「メしてくれたら嬉しいな…

俺の小説が「メされないほどしょっちもないのか、それともメをするのが面倒な人が多いのかwww

第五話 ～作戦会議編～

「どうも、春生まれの白石秋斗です。

放課後、僕と関野さんは作戦会議のために廊下で集合しました。

「秋斗さんっ！　すごいです！　転校生はかなりの美人です！　…

まあ私にはかないませんがね」

「そうですか…。やはり転校生は美人と相場が決まってるのですね」

「スルーですか。そうですか」

「それじゃあ関野さんは何か依頼されたら僕に連絡してください」

「はいっ」

それでも心配ですね。

そのクラスに、というか学年に僕がいるわけじゃないから。

そうすると、僕の名前が知れているのか分からぬし、関野さんは仲人として有名とはどうも思えないし。

「となると…。年下好きが僕に相談を持ちかけてくるのを待つしかない」と

「何か言いましたー？」

「いえなにも」

「ふむ。年下好きねえ…。

「あれ、白石君じゃないか」

「ひい！　秋斗さん助けてえ」

「おー、どーぞ。お久しぶりです笹川さん」

関野さんを拉致した笹川さんが現れました！

「あはは…。やっぱり嫌われちゃった？」

「当たり前です！」

「おー、どーぞ。暴れないでください」

「私は馬ですか！」

「どっちかといつとゴリラあたりじゃ…　いててー…」

足の指があ！

「秋斗さん…一緒に寝たことバラしますよ？」

「なつ…。君は関野さんを抱いたと言つのかい白石く…いたたたた
！…一人して足を踏まないでほしいけど…」

「変態っ！」「変態っ！」

なんだか話がそれで良かつたかもしれないです。

「いや、最近転校生が来たと聞いてね。仲人引き受けってくれよ」「二タニタとする笹川さん。こんなキャラでしたつけ？

「秋斗さん、どうします？」「まあ… 笹川さんは…まあ…うん」「なんで！ なんで即答してくれないの！」

「良いでしょう喜んで…」「秋斗さん正氣ですかっ！」

……やつぱりやめようかな。

でもまあ、笹川さんの評判は皆には良いはず。

イケメンだし。

「やつたあ！ さあ、僕を案内したまえ」

絶対キャラが変わつてますよこの人…。

「それでは私のクラスにれつづらーーーーーです！」「あれ… 関野さんのクラスだつたんだ。

…と、歩き続けて関野さんのクラスへ。

関野さんが転校生を指差す。

「おお、かわいいかも」

「まあ私には叶いませんがね」

「おーーーー！ あれぞまさしく僕の理想！」

「笹川さん…。

「さあて、教室に入りますよっ！」

関野さんがノリノリだあ！

第五話。～作戦会議編（後書き）

なんというか、すぐ遅れました。
すいません。

これからも不定期更新です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4252j/>

告白は激闘だ2

2010年10月8日22時04分発行